

### Ⅲ分野 第12分科会

#### いじめ・不登校

司会者 多田 謙吾 山西 周二

記録者 三木 祐司 宮城 兆成

報告者Ⅰ 河合 知佐（東播磨）

共に生きる心豊かな児童の育成

～「自ら学ぶ」「認め合う」～

報告者Ⅱ 後垣 雅子（但馬）

香住小学校におけるいじめ・不登校に対する取組～人権教育推進事業「杉の子学級」を核とした人権教育を通して～

報告者Ⅲ 西條 慎祐（淡路）

不登校経験を有する生徒への取組

#### 討議の概要

##### <報告Ⅰについて>

**司会** 詳しく聞きたいところや質問があればどうぞ。

**但馬** いじめについては、学校全体で取り組んでいることが分かった。取り組みを通していじめの認知件数はどうか。

**報告者Ⅰ** 6月に初めてアンケートをとり、翌年1月か2月にもアンケートをとった。認知件数については減ってきていると感じるが、全部はなくなる。まだまだ0とは言いきれない。嫌な思いをしている子がいるのが実情である。

**東播磨** いじめアンケートを困りごとアンケートと名称を改めた。細かい点もあがってくるようになった。各担任がそれぞれについて事実確認している。細かい点まで認知して対応しているのは良くなったところである。深刻ないじめの件数は減ってきていると感じている。

**丹波** 丁寧な研究をされている。取組を頑張れば頑張るほど認知件数は増えるという体験がある。それは、今まで見過ごされていたことも認知されるからである。初期段階で認知されることは良いことだと思う。介入することで効果があったという、何か指標としてあるのか。

**報告者Ⅰ** 指導＝問題行動ととらえられがちだ。しかし、あるゆる子ども一人一人に対して、自尊感情を高めていけるような指導が大切だと感じている。すぐに結果につながるのには難しいと思う。予防的に行う指導や職員の意識も高めていけるように、これからも学校全体で取り組んでいきたい。

**司会** QUテストを年2回されているが、結果に変化はあったか。

**報告者Ⅰ** 講師を招いてQUを活用しようとしているが、まだまだ活用できていないのが実情。結果を分析して、一人一人に対応していく必要がある。

**東播磨** QUをすることで、教師が満足してしまっている点がある。1回目に低い結果が出た子どもについては気にかけて見守るようにしているので、2回目の方が結果は良くなる。

**但馬** スマホ宣言について、低学年から高学年への接続はどうか。

**報告者Ⅰ** 保護者にできるだけ声掛けをしている。保護者からは、子どもたちは、ノーメディアデーの日はがんばるが、他の日はあまりがんばらないという意見もある。個々の児童にメディアの使い方を指導することもある。学校・地域・保護者が連携して取り組むべきものだと感じている。

**阪神** いじめの認知件数は、文科省の指針では、ちょっとしたことでもあげなければならない。個人的には、いじめの対応についてはそれぞれの事象で精査していかなければならないと思っている。また、LINEのもめごとが多くなっている。女子3人で起こるケースが多い。見えることに対しては学校も対応しやすいが、見えないことについても対応していくことが、これからは大切だと思う。QUについては、一つの指標として先生同士で意見を交流し合うことが大事である。

**司会者** 報告の感想が多くなっているが、各校の取組も紹介していただいて、討議していきたい。  
**淡路** 「学び合い」を発表されていたが、「学び合い」をすることがいじめをなくすことに有効であるか。

**報告者Ⅰ** クラスの中の人間関係が見えてくる。見えていなかったところが見えてくるので、いじめの早期発見につながっていくと考えている。

**東播磨** 担任によると「勉強が楽しくなってきた」という児童が増えてきているようだ。

**淡路** 学び合いによる学習効果が、学級の雰囲気をよくしていくと今思った。学習効果をもっと広げていけたらよい。

**但馬** 「フィルタリングをしているから大丈夫です」という保護者がいるが、そういう家庭に限って目が行き届いていない場合がある。

**報告者Ⅰ** 保護者の意識を高めることは簡単ではない。情報教育の講演会を開くが、なかなか人が集まらない。子どもたちの方がよく知っていることもあるので、こちらも勉強していかなければ

ならない。

#### <報告Ⅱについて>

**司会** 詳しく聞きたいところや質問があればどうぞ。

**淡路** すばらしいと思ったのは、人権教育推進事業の杉の子学級があることだ。他の子どもたちや他校と交流する取組が続いていることに対して感銘を受けた。事業を続けていく中での課題は何か。また、外国にルーツのある子どもたちに対する課題や支援はどのようなものがあるか。

**報告者Ⅱ** 杉の子学級を進める上での課題は、学級数が減少し、学級生がいない学年もあることだ。子ども会には何人かいても、杉の子学級に参加しない子も多い。参加している子の方が珍しいという現状がある。地域の人の中に、「このような取組はしなくてもよいのでは」という意見もある。昔と変わってきていると思う。地域の壮年会と教職員との交流会をした際に、30代40代の保護者からも差別事象の話を聞いた。杉の子学級で学んだことで、解決できることも多い。続けていかなければならないと思う。外国にルーツのある子については、取り出し学習やTTでの対応、視覚に訴える工夫をしている。

**丹波** 毎年募集をかけて今年は4名だったということだが、募集をかけて0名だったときはどうするのか。また、学級生がなくなった場合はあったか。

**報告者Ⅱ** 今、まさにそのような時期だ。1・2年生がいない。学校だけではどうしようもない。募集方法を教育委員会に相談している。

**北播** 人権差別の事象があったときに「それはおかしいのではないか」という一言があり、人権学習が浸透していると感じた。5年生に杉の子学級があることをどのように説明しているか。保護者に対してはどのように説明しているか。

**但馬** 寝た子を起こすことになると言う人もいる。地域の人権活動をしている方に、どのようにして杉の子学級ができてきたのか、どのように人権学習を進めていくのかを話してもらっている。また、人権学習をPTAの柱として進めている。保護者も学び直すという意識で、講演会もしている。保護者として、親としてどのように人権学習を進めていくのかを確認する場としている。

**司会** 各校の取組をお願いしたい。

**但馬** 隣の校区である。同じ中学校へあがる児童がいるので、学校毎の人権学習の取組内容に差がないように注意しなければならない。昨年、担

任が若手であったので、杉の子学級のことを事前に学習してから発表会に臨んだ。周りの学校についても良い学習となっている。

**司会** 中学校では、どのように取り組んでいるのか。

**報告者Ⅱ** あすなろ学級があり、活動のひとつとして、町広報の朗読録音のボランティアも行っている。

**但馬** 大阪の人権博物館に行って学習している。学級生が少ないので、同じ部活の生徒を誘って一緒に活動しているときもある。

**西播磨** タンポポ学級という推進事業をしている。人数が減少しているのは同じ。本来の主旨の学習が薄くなってきている。この先どうなるのかと心配する。保護者から「楽しいことをする学級なのか」という問い合わせがある。「(部落差別との)出会いの場をつくるな」という意見もあり、悩んでいる。

**司会者** 始まった頃の保護者と世代が入れ替わってしまっているのも、やりにくい面がある。

**東播磨** 解放学級は「やってほしい」という保護者と「もうええで」という保護者がいる。部落差別に特化した勉強はしにくい。地域の方が「寝た子はおこすな」と言っても、なくなっていない。学習をしていない大人が誤ったことを伝えてしまっている。

**但馬** 解放学級がなくなったときにどのように取り組んでいくのかが大きな課題となっている。60代は同和問題を学習しているが、若い世代は知らないことが多い。全体討議の中で意見交流もしていけたらと思う。

#### <報告Ⅲについて>

**司会** もう少し聞きたいことや質問があればどうぞ。卒業した生徒たちの動向を教えてください。

**報告者Ⅲ** 淡路市内の就職が多い。就職活動をしていると、卒業生の話聞くことが多い。

**司会** 学校としてつながりを持つシステムがあるのか。

**報告者Ⅲ** 進路指導をするときに就職先から話を聞くということがある。

**但馬** 中学校で進路指導をしていると、定時制に行く生徒の中には、ネガティブな考えで、続けるのが難しいこともあるが、報告者の学校は様子が違うのか。

**報告者Ⅲ** 入学してくる生徒には、二次募集や学力的に厳しい生徒もいる。髪の色を変えたり、ピアスをしていたりしても、認めている。認めてい

くところが本校の特徴である。

**但馬** とらえ方によると悪い方向に行くことも考えられるが、認められることによって、生徒が良い方向へ行っていると感じられるか。

**報告者Ⅲ** 生徒と対立しないことが大切だと考えている。寄り添うことも大切だと思う。

**東播磨** 小学校で、低学年から中・高学年になったときに不登校になった子は、中学校へ進学してもなかなか登校できない場合がある。しかし、高校入学が一つのきっかけになるのではないかと報告を聞いて思った。過去に不登校を経験した生徒が、高校でも不登校になる割合は高いのかどうか。わかる範囲で教えてほしい。

**報告者Ⅲ** 高校にきて自分を出しにくいという生徒はいる。そのような生徒には、「無理しなくてもよい。帰ってもよい」という声掛けをしている。本人の意思を尊重することを大切にしている。

**司会者** 学び直しがキーワードとなる。不登校について意見があればどうぞ。

**但馬** なぜ不登校なのか分からないという生徒には、ゆとりをもって接することが一つの工夫となると感想を持った。

**但馬** 小・中では、どちらもなかなかゆとりを持ってないのが現状である。登校刺激をどの程度されているのか。また、登校してきたら社会のルールを学ばせたいと思うのだが…。就職してからの離職率はどうか。分かる範囲で教えてほしい。

**報告者Ⅲ** 登校刺激について、現在、不登校の生徒との連絡ツールとして LINE を使っている。また、電話をしたり、家庭訪問をしたりしている。離職率については分からないが、やめた後も次のところが決まっているという話を聞くことがある。

**但馬** 不登校生徒との関わりがあるが、不登校の理由はわからないことが多い。理由を明らかにした方が良いのか、踏み込まない方がいいのか教えて欲しい。

**但馬** 外部からの刺激で不登校になるのは対応しやすいが、宿題をしないために教師から怒られると心配している子など、自分が原因で不登校になった子の対応はしにくい。

**司会者** 会場の若い先生方の悩みに会場全員で答えていきたいと思う。始めに報告者からどうぞ。

**報告者Ⅲ** 職場の先輩からアドバイスをもらった。風邪と一緒に原因を追究するのはよくない。取組としてはまだ分からない。

**司会者** 保護者に向けての対応は。

**報告者Ⅲ** 義務教育と高校教育の違いがある。

**但馬** 保護者の働きが弱いこともあるが、保護者を追い詰めても良くない。本校にも不登校があるが、1週間丸々休むのではなく、1日でも登校できたら良いと思っている。宿題については、本当の理由ではない可能性がある。理由については見つけようと拘らない方が良いと思う。

**但馬** 不登校は犯人捜しをしないのが基本である。本人もわからないケースがある。親は共感してあげないといけない。見守っていくことが大切。たまには連れ出してその子の興味のあることをさせてやるのも良い。宿題については少なくしたり、しなくてもよいと伝えたりすることで登校できるケースもある。

**但馬** 中1で大便をもらしてしまい、不登校になった生徒がいた。何回も家庭訪問を繰り返し、その生徒との信頼関係を築いて対策を練った。数カ月かかったが、登校できるようになった。不登校になるのは、父親の存在が見えない家庭が多い。母親任せにしていると不登校傾向になる。昼夜逆転の子もなりやすい。普通の生活に戻してやるのが大事。教師と家庭が連携することが大切だ。

## <全体討議>

**但馬** いじめにしても不登校にしても対策は必要。「これは変だよな」と言える学級づくりが大切。自分の心の中でいけないことだと分かる心づくりを大事にしていく。いろいろな場面で見直していくこと。いじめ・不登校「ゼロ」という言葉を使うとしんどくなる。学び直しという言葉について、学力保障は時間がかかってもしていくこと。子どもの問題に対して、母親が責められすぎていることがある。保護者に寄り添っていくこと。

**司会者** 続けてどうぞ。

**但馬** 通級指導3年目。不登校の中学生と勉強することもある。特別支援学校の先生とも話すことがある。小学校時代は学校に来るが、中学校に入ると知恵がついて休むようになる。小学校時代から早期発見で丁寧にみていく。通級担当と担任やスクールカウンセラーと連携していくことも大事だと思う。

**但馬** いじめについての体験談。一人の子が勝手な振る舞いをして周りの子が嫌な思いをしたとき、学活で班での話し合いをした。不満だけでなくいじめっ子の良い所も話し合った。子どもたち同士の力で解決していけるような話し合いができることが大切だ。

**丹波** 子どもの度量の話が多いが、別の視点で考えると、職員室の職員集団が仲良かったら大丈夫

かなと思う。子どもたちに良いモデルを示しているか。良いモデルは必ず必要だと思う。何か問題があるときに、教師間で困っていることを話すことができる環境作りが大事だと思う。

**東播磨** できるだけ先生方からの生の声が聴けるように雰囲気を作っていくことが大事と思う。

**淡路** 中学校にいたので、職員室の話はよく分かる。先生が先生を見捨てないことが子どもたちにもつながっていくと思う。

**司会者** 途中の発表であった杉の子学級の話で、もう少し情報共有できたらと思う。

**西播磨** 一番困っているのは子どもに主旨を伝えること。学校としてどのように位置付けていくか。昔はそこをまず確認していた。しかし、今は目の前の子どもたちに伝えていない現実がある。そこを伝えないことには主旨が消えていってしまうと思う。

**司会者** 他に同じようなことがあればご意見を出してもらいたい。

**但馬** 杉の子学級の OB だ。学んでいた頃は、めんどくさいという思いがあった。大人になってからの同窓会での出来事。県外に行った同級生が「ありがとう」と言ってくれた。部落差別が原因で会社でいじめられていた同僚がいて、その子を助けることができたという話だった。弱い立場になる人は、誰かの助けによって救われることがある。学習してよかったと思う。

## 2 総括と今後の課題

本分科会では、稲美町立母里小学校、香美町立香住小学校、県立洲本高等学校定時制から3本の実践報告があった。

1 本目は学校のいじめについて、様々なデータと分析に基づいた取組をした事例。いじめがなぜ駄目なのかを、児童と様々な場面で確認することの大切さを学んだ。

2 本目は人権教育推進事業を中心にしたいじめ・不登校の解消への取組の事例。さらにその学びを他の学校や保護者に伝えていく。そして部落差別について地域全体で共有し、考えていくことを学んだ。

3 本目は定時制高校での不登校経験を有する生徒の「学び直し」への取組の事例。誰もが安心していられる場所、必要とされていることを実感できることの大切さを学んだ。しかし、それは定時制高校に限ったことではなく、すべての学校において、子どもたちの人権を考える上において重要であり、学校を卒業した後でも、社会教育の場

において、「学び直し」につながっていくことだと学んだ。

現在、各地域で、外国にルーツのある子どもが増えている。言葉の壁や文化の違いで、その子どもがいじめのない差別を受け「学び」を保障されないとなれば、その家族も含めて学ぶ場面を社会全体としてどのように作っていくのか。私たちが見過ごしていることがあるのではないかとふりかえる必要がある。このことは、学校だけでできるのではなく、自治体や地域、保護者と連携して、何ができるのかを考えていくことが社会全体にとって大切である。

最後に、今日、差別の現実から深く学ぶという大会テーマが示されたが、差別の現実が、ともすると見えにくくなっているように感じられる。SNS が広がっていく中で、それを、自分の不満のはけ口や不安の解消に使うことが見られる。人権侵害をしてしまう人間の弱さが見られる。子どもたちはその世界にどっぷり浸かっていて、大人がそのことを見過ごしていく状況があり、そのことによって新たな差別が生み出される可能性は常にあるということを共有できた。これらのことについて、私達は、怖がらずに、真っ向から取り組んでいくことが求められている。

今日の報告の中で LINE を通して生徒とつながる事例が出された。それは学校においては、以前なら受け入れられないことであったが、そのことによって救われる子どもがいるとしたら、有効なツールとして考えることも必要である。

最後に、全体会で示されたように、部落差別解消法が施行され3年目を迎える。すべての学校における部落問題学習を、子どもが自分のこととして感じられるような出会い方や、深め方をどのように進めていくのか。切り口はいろいろあるが、例えば、いじめや不登校の問題を人権課題としてきちんととらえ、そのとらえ方を深め広げること、部落差別解消につながるという実践が期待される。さらに、人権の視点で「つなぐ」とか「ネットワークをつくる」ことによって、みんなが救われる社会を作っていくことが今後も大切であり、その実践も期待される。